

超
日
月
光
(體現位)

體 現 の 位

智慧の日月の照す下　光の中に生活(くわ)す身は

聖意を己が意とし　三業四威儀につとむなり

すでに信心開發し靈我に更生したる後は即ち佛子である。

如來と共に在り、如來の中に我あり、絶對無限の如來は個性なる我に依つて現はる。佛子なる我は天地萬物を脚下に蹈へて、高く宇宙の無限も此個體の中に溶け込んで居る。此自己は絶對の大海に根底を隠して尖頭を水上に現はして居る巖である。若し此個性が無くなるとすれば宇宙萬物は悉く己に於て價值が滅して仕舞ふ。

佛子たる我は一方には作佛度生(さくぶつど)の二心ありて、一方には如來の智慧と慈悲との光明中に佛子の願望たる圓滿なる靈我を充實せんが爲めに、益々向上的に一步々々に新なる開拓をして、佛に成らんと進行すべきである。

即ち開發は我如來の子として父の全き如くに全からんことを願望し、一切菩薩の萬行を以て佛子の靈格を莊嚴す。

心靈生活の衣食住——衣

例へば此の身體の生活にも衣食住を要する如く、靈の生活にも靈の衣食住が必要である。

心靈に如來の賜なる應法妙服を着る。應法妙服とは自己の如法なる道德秩序の正しき生活を云ふ。

俗に云はゞ常識に應ふやうな生活である。人格を莊嚴する處の品位を完全に爲なくてはならぬ。恭儉以て己を持し仁讓以て他に待す。先王の法服に非れば敢て服せずと云ふごとく、法に如(妙)ふ行爲を以て(一)また經に應法の妙服が自然に身に在りてふは、信心誠に得る時は、自然に人格が具備して道德秩序の正しさが自ら身に備つて來ることである。

衣に慚恥衣と云ふは心光身を照して己が行爲を返照すること、神聖なる光明の中に廉恥の服を身につけてあれば破廉恥の行爲は自づと慎み、如來照鑑の前に常に屋漏に恥づと云ふやうな慚が身に備は

るのを慚恥の服と云ふ。また柔和忍辱の衣とは慈悲の光に觸るれば身意柔和となりてかりそめに怒らず他人より罵詈謗恣を被むるも忍辱(忍辱)の衣厚ければ快く忍耐が出来る。經に「縱令骨節支解せられても、甘露を飲むが如くに悦べよ」と。

食

食は靈の糧。身體に滋養に富む物を攝取する如くに靈にも滋養分を要す。朝夕の禮拜讃唱の中もまた三昧にして、若しは冥想中に三昧の妙味を感じ、また常に念に隨つて法喜ありて、内心の靈感極りなく覺へらるゝが故に、自ら神魂を潤ひ、身心輕安、歡喜究りなきに至る。また「佛法の味を、愛樂し、禪三昧を食とす」とは此靈の食である。また佛陀は一饗の力を以て無量劫飢えず衰へず姿色も清らかに光顔も異ることがない。此妙味は法悦と云ふ靈の妙味を味ひし人にして始めて語るべきである。

住

心靈の安住する所即ち平生心の安んずべき所。この身體も住家なきは乞食非人の如くである。又縱令身は金殿玉樓に住すとも精神に安住所なきものは靈の非人である。共に天を語るべき資格はない。

靈はいかなる所に住すべきであるかとなれば、吾人は常に如來と共に大光明中無比莊嚴の心殿に住してゐる。慈悲の懷に安住して居る。若し心靈の常恒安住する心殿を得ば、また大慈の堂と云ふも、自己の如來大悲の室に安住して居る時は、自己もまた慈悲化して他に對して同體大悲の同情心に富んで来る。心靈如來大我の中に安住するが故に娑婆の種々八風のために動搖せられぬ。

人は衣食住を全うして禮節も成る。心靈の衣食住にしてまだ完全せざる者にして道德行爲が出来る筈は無い。心靈の衣食住は如來と共に在ることを得れば自ら具備するに至る。

聖意を己が意志とす（人生は向上の一路）

人生の價值は大なるものと聯絡したる心意が終身その力を盡して努力する處に價あり。すでに如來の中に安住し心靈生活に衣食住を要するものは働く爲めである。

聖意とは神聖正義恩寵の三徳を云ふ。如來の神聖は即ち行爲を鑑照し給ふ智慧である。如來は世の道德秩序の光明である。如來は一切衆生を有終の全きに標準して神聖の智光普く衆生の道德界を照し

給ふことは、恰も太陽が外界を照すが如くである。若し太陽の光なかりせば世は闇黒である。衆生の道德界に神聖の光明なかりせば道德秩序は闇黒である。神聖の智は吾人の心地には正知見(正智)の心にて、眞理の標準に稱(な)ふ正中の意志と現はれて自己の道德行爲を指導する光となる。即ち如來から自己に現ずる意志である。最高理想の道德意志である。それが即ち正知見と云ふ最高等なる良心である其神聖は眞理であるから侵すことが出来ぬ。其の正知見から出づる行爲が即ち正義である。邪と惡とを捨てゝ正と善とに向つて努力することである。如來の本願捨惡擇善と云ふは正義のことである。

正義に八正道あり。是聖意にかなふ行爲である。光明行爲の標準である。八正道(八正道)とは正見、正思、正語、正業、正命(正命)、正精進、正念、正定(正定)を云ふ。

神聖なる正見が意志の光から思惟することは正しい。人正見の光缺ぐれば邪の思考が頭腦中に浮び、思想が正しければ其を外に發表する言語も虚偽惡口兩舌等なく、眞面目に正直に出づる。また身に於て行ふ所も正善となる。殺生、偷盜、邪淫等を始めすべて不正の行爲を遠ざけて正善を行ふ。正命とは生活の意である。人の生命は縱令詐偽偷盜等によりて得た食物にても養分さへ取れば肉體は養

はる、併し斯の如きは不正なる生命である。渴しても盜泉の水を飲まず正しき生活をなす之聖き生命である。正精進とは勇猛精進に努力すべき事、之正善でなくてはならぬ。假令晝夜二六時中身心を苦勵して頭燃を救ふが如くなるも聖意にかなふ行爲でなくてはならぬ。正念とは內的に活動するは念である。所謂八億四千の念が若し聖意より自己の心念に衝動する時は念として佛ならざるはなし。古人云はく、一念彌陀に在れば一念の佛、念々彌陀にあれば念々の佛と。内に佛の念を以て活動する時は外に向つてまた佛行を爲す。正定は一心に聖意が全く自己の意志と成て動ぜざるを正定と云ふ。此八正道は神聖正義を體して身口意の三業に現はす道業である。

恩寵——神聖正義の聖意が衆生の心意として實現するに至るはすでに信の成熟したる上に於て能くす。譬へば小兒は成人の後に全き業務に堪へ得らるゝ如くに、佛子たる心靈が成長して後、聖意を現はすつとめが出来る。人の此の心意を増長せしむるは如來の恩寵である。恩寵は母が子を養育する如き作用にて、如來大慈愛の光は人の靈性を増長せしむ。前の靈性の衣食住の例の如きは悉く如來恩寵の加はる所に行て行はる。

聖意を現はす行爲

聖意を體現するは光明の行爲である。

聖典に、聖きに生れ更(か)りたる聖徒等は、其講説する所あれば聖き思想の發表をして常に正しきを宣ふ。是己の心正しなければなり。

正き智慧の明から出づる言は道に契ふて、違ふこと又あやまることなく、衣食住等の凡ての物に我物の心なく、染着の心なく、去るも來るも進むも止るも情に繋がるゝなく、自由意志が最もよく發達しあれば、之を適し彼は莫すと云ふなく、いかなる境遇にも自ら満足を感じず。公平無私にして彼と我との私の圖(はか)なければ、他と競争することも又他人の非を説くこともなく、諸の階級の人に對して彼を見ることが己の如く恕(ゆる)り、同體慈愛を以て凡てを饒益せんと想ふ。人格圓滿に訓練、溫良、柔軟に、すでに調伏しあれば、たとへ他より罵詈譏謗せらるるも、忿り又恨むなどの心もなく、佛の心を以て己が心とす。

八 正 道

信心すでに開展して如來の中の光明生活、即ち如來の神的衝動より實行々動するを聖道と爲す。即ち如來の司導する行爲なり。

また佛知見開示して佛の正道に行爲する故に正道とも云ふ。聖道は一時に非ずして、常恒不斷に進歩すべき過程なるが故に、絶對的如來に依屬せる精神にも、自己の習氣(せうき)は肉のあらん限りは、ゆるがせにする時は退歩の憂なきこと能はず。彌陀の恩寵の中に在つてもまた自己の罪惡を生ず。念々に恩寵を感じて念々に罪惡を轉ずべし。罪惡の性もとは菩提なる故に、如來の恩寵によれば忽ち變轉して如來の靈能顯はる。如來の無限の光明の中に常恒不斷に念々に一歩々々新らしき地歩を收めざるべからず。歩々不斷の靈光によりて新しき地を占め、念々に起り來る煩惱をして悉く如來の増上緣力の下に靈化せざるべからず。是の如きの信仰を鞏固にして金剛の意をなす。

此聖道即ち道德自修の目的となす處は改善にあり。改善とは自己を剋して如來の聖意に服せしむる

にあり。この改善は修練習慣によりて全く性格を變更するにあり。消極的には利己の惡を脱却して積極には如來の理性即ち至高善を得んと練習す。

八正道即ち正見乃至正定は小乗のとは名目に於ては同じきも、其内容に於ては全く異なるなり。

八正悉く如來の中の神的行爲にして、如來の光明聖意を自己に實現し、如來の目的に協力して、聖道に進趣活動する行動なり。

正 見

佛知見開示してこの正知見が司導となりて行動す。すでに正知見開示する時は従前の盲目的衝動によらず、自己は如來の中の個人たるを意識し、如來の終局目的に協力し、神聖正義の光が自己主觀の光となりて、此光の中に實行すべき命令となり、即ち絕對理性の彌陀の内容を自己の主目的とし、道德的自律を完成して、客觀的目的を主觀的規律となす。正見は云はゞ通じては理解性にして眞非眞を認識する職分にして又善惡の行爲を決定すべき意志なり。正見は意思を決定して正善に指導す。正知見なき情操と意思とは正善に決定すること能はず。

正 思

如來に依る思惟を正思とし、爾らざるものを不正また邪思惟となす。人は思惟によりて善惡邪正の決定すべき目的を思惟し籌慮す。すでに恩寵獲得したる人も、猶天然の性存する間は放恣にするときは墮落の憂なき能はず。すでに獲得したる恩寵即ち聖意を實現せんと思惟し、法藏比丘の如く思惟し撰擇し習學して、常に自己の麤惡を捨て如來の眞善を選取し、常に新にしてまた新なれ。

一たび恩寵獲得してよりは、正思惟によりて正邪善惡を見ることが明かなるが故に自己をすてて如來の正善を選取するに甚だ便利なり。

理性的意思是理想によりて規定せられたる人の意思の最高の發展形式なり。理性的意思是天然生理に規定せらるゝ下等の意思衝動欲望に對して、正義の理性によつて批判撰擇の務に任ず。理性的意思即ち良心が天然意思を正思惟によりて修練し訓練す。意思の自由は佛性にして、此の理性の自由即ち正思惟によりて如來の目的に協力せざるべからず。人間の自由は聖靈をして動物的欲望を支配せしむるにあり。人間の意思自由は感覺的欲望及び性癖を理性と良心によりて統攝し、目的及び規則に従つて其生活を規定する能力なり。

積極には眞實を守り、權理を保ち、家庭社會の秩序を紊さざる如き、消極には不殺不盜、不邪淫等の如き、如來恩寵に衝動さるゝ作業活動なり。自己の惡素質と從來の惡習慣とは聖意に適せざるものとして矯正し、如來の道德的性格を養ひ、聖意の實現に意を注ぎ、靈化の恩寵をうけて道德實行するにあり。すでに情操は一變して退轉せざるも、之を實行々動に實現するに非ざれば未だ正業とするに足らず。良心よく主觀的に道德秩序を發見し、自律的に一切の身業悉く如來の聖意實現的に行爲す。恩寵を獲得して意思の靈化即ち菩提心顯動せざるべからず。其動作にして客觀的には行爲者及び其周圍の人に安寧を増進する圓滿なる生活形式を成就する傾向を有し、之と同時に主觀的には義務を盡せりとの意識を有する時は之を道德的に善と稱す。

善人は必ず其業務を怠らず、各自の職分を全うす。自ら恩寵中なる自己の義務を盡せりとする行爲は正業にして、自ら斯々の作爲は聖意にそむくものとする行爲は邪業なり。法華經に佛法を體得する人は一切の治生産業も悉く實相と相應すと。

全く恩寵に依り一切の生業を悉く如來の命令として、恩寵自己にあつて活動する職務は是正業なり。また善の動作なりとす。

正 精 進

人はすでに全心全幅を如來に投じて恩寵を離れたる自己の情操なきを感じ、如來に安立して性格も一轉して變化せるも、天然の自己あらん限りは煩惱及び誘惑物との健闘を廢止すべきに非ず。

人如來の中の精神生活をなし、即ち此土の諸々の衆生と共に平等の同じ恩寵に靈化して、精神的に此土に安寧界を建設し、神的理想を實現せんが爲には、直前往進して個人の利害生命をも犠牲に供せざる可からず。既に靈化せし意志は自身の利害生命を犠牲に供することに躊躇せざるに至らん。

正 命

正善なる生活を正命とす。

人の理性に適合する生活は人間の絶對目的にして、理性に適合する生活を營むは即ち其安寧を求むる所以なり。よく體力と健康を保ち、正善なる身體及び精神の諸能力を圓滿に發展せしめ、一切の理性的倫理的生活活動を増進し、自己と自己に近き人々との關係を益々親密ならしめ、如來の恩寵によりて精神生活の内容を深くして、神的安寧を得て圓滿に生活す。

至善は如來の恩寵にして、如來の聖寵に充ちたる内容即ち性格と行爲にて到達す。正義の觀念によ

りて盡すべき義務を全うし、自己を捨て、聖種性性格とし、正しき意志決定を涵養す。（以下斷絶）

恩寵體現

恩寵の體現は思想と言語と行爲とがおのづから如來の聖意にかなふて自他兼濟の活動を爲す。

四攝、六度、十二徳の實行なり。（註―六度又六波羅密は施、戒、忍、進、禪、慧）

四弘誓願

菩薩は願と行とを以て自己の生命とす。

現在より盡未來際に至るまで、衆生無邊なれども誓つて度せん。

煩惱無邊なれども誓つて斷ぜん。

法門無盡なれども誓つて學せん。

無上菩提をば誓つて證せん。

乃至、普賢の行願。生々世々常恒に諸佛を勸請し、諸佛に親近し、諸佛を供養し、乃至、一切の法を學び、一切の行を修し、一切の衆生を度し、如斯誓願虛空法界盡んも我願は盡きること無らんと。

諸佛に十八不共の法あり。是菩薩になき所なる故に不共と云ふ。中に精進無滅欲無滅と云ふことあり。諸佛は已に無上菩提を得て一も圓滿ならざるはなし。然れども精進無滅にして常に勇猛に勤修し、欲無滅にして徳を積み功を累ぬること限りなし。

諸佛すでに爾り、薄地の凡夫何ぞ倣はざらんや。

四 攝

一、布施。しきほどこす。おもひやりて人にほどこす。

二、愛語。人をしんから愛する心から出づることば。

三、同事。おもひやりからして、彼と同じようになりてなすこと。

四、利行。人に利益を與へるおこない。

布施に三種あり。財施、法施、無畏施なり。

戒

攝律儀戒。一切惡を止む。

五戒、十戒、十無盡戒、八萬四千威儀戒等に至るまで悉く此中に攝す。
攝善法戒。一切の善を作(な)す。

四攝六波羅密より乃至一切善事此中に攝す。

饒益(やく)有情(じやう)戒。一切衆生を利益す。

無上道

宇宙大法の勢力。一切衆生を本覺の深源に到達さすべき大道宇宙に存在す。之を阿耨多羅三藐三菩提あうくらさんみょうさんぼだいと云ふ。譯すれば無上道、此大道の勢力が萬有に内存し一切諸佛此大道に入つて大道に隨順して成佛し給へり。此大道は自然界に天體の軌道が在りて有らゆる星辰が其軌道を逸せずして幾千萬年に變らず循環する如く、一切衆生の精神を攝めて常恒に運行する靈的大道を阿耨菩提と名づく。尙例せば天命之を性と云ふ性に率ひきふ之を道と云ふ。天命の性が行ふべき道である。私を離れたる天の道である。基督が謂ゆる我は我道を行くに非ずして神の道を行くなり。我道は即ち私の道、私の道は闇より闇への地獄に行く道である。佛教にて有漏の迷の業道に六道あり。即ち三善道と三惡道である。邪見を以て逆惡の業道は即ち地獄の道である。仁義五常の常倫を行ふは人道である。又無漏むろうの聖悟の三道あり、聲聞菩提、緣覺菩提、無上菩提。菩提は道である。

道に世間の國道また縣道等の如く、國中より帝都に通ずるを國道を云ひ、其縣下より縣廳に達するを縣道と云ふ如く、聲聞涅槃、即阿羅漢果の涅槃を得んには聲聞の道諦の三十七道品を修して究竟地に至る。一切諸佛と等しく無上正覺菩提に到らんには無上菩提心、四弘誓願むね等の大道心を發す。故に無上の佛陀に至らんには自己の因果を捨て我がを捨て如來の大道に参加す之を發菩提心とす。

菩提とは是一切諸佛の在ます處、諸佛は有ゆる五十一地の煩惱を除き元品無明(びんぎん)をも破りて妙覺の位に入る。永く無明の父母に別れ究竟して涅槃(ねはん)の山頂に登り、諸法不生なれば、般若不生、之を大涅槃と名づく。絕大法性の大虛を座と爲し、清淨法身を成(なり)じて常寂光土に居るとは是臺家が無上覺を成じたる相を明す。諸佛無上の覺位に到達する道程を無上道と名づく。道を如何にして行くなれば臺家には實は法性眞如の月は自然にして然り。煩惱も染むる事能はず苦も惱ますこと能はず道も通ずること能はず滅も淨むること能はず雲の月を籠むとも妨害すること能はざる如し。煩惱さへ却くれば即ち法性の月は見ゆると。道とは本覺の月を顯はし雲を除く道である。曰く法性は月の如く苦集は雲の如く道は却除の如く滅は却已の如し。

佛陀は宇宙の大法即ち眞如法性の眞理を悟りなされて、之に隨順すれば成佛、之に逆戻すれば生死に流轉すと教へ、法性の理を覺るべき法が佛法である。佛家に發すべき菩提心は宇宙大道即ち自性清淨の常寂光土清淨法身に到達すべきを無上菩提心と名づけ、是宇宙大法と大道に順つて終局目的に達すべきを教へたまへり。

菩 提 心

佛教の終局目的を實行の方からは言はゞ、上求（じき）菩提、下化（げ）衆生が佛心佛行の意志である、目的である。上求とは願作佛心（ねがひ）、換言すれば完全圓滿な靈格人格と成り度いと云ふ願望である。下化とは一切の衆生を共に自己と同一に完成せんとする願望である。向上、向下の願望である。

願作佛心の根底は衆生の心の根には衆生悉有佛性として人々本來圓滿なる靈格即ち佛に成り得らるゝ本能を持て居る。この靈の本能を完全に開發し圓滿に完成せんと欲せば之を成就せしむる法に由らざるを得ず。例へば人に知識の能があつても教育等の助成するに由らざれば其の知能も開發せざる如く、佛性具有するとも開發の法を待たざるを得ず。佛法即ち其れが開發の機關である。

本宇宙全一なる靈體の一分なる靈性が如何に開發すべく實現すべきや、是佛行である。佛性を實現せざれば上求の向上すること能はず、宇宙には無上菩提てふ自ら至善圓滿なる神國に達し得らるゝ大道あり。宇宙大道が即ち無上菩提なので此大道法に隨ふ者が菩提心と云ふ。菩提心は即ち終局に歸す

る大法に則つたのである。

本來宇宙にはかくの如き大道法が存在し之が即佛法である。其の道法の存することは、宇宙に自然法の行はれて居ると同じことにて、自然法は自然界に行はるゝ日月星等の運行となり一切萬物の理法と爲つて居る。無上大道法が宇宙に存在して、衆生此大道法に合致したる意志が即ち菩提心である。

人は靈性的生命を以て動物界を超えて肉の生活以上の靈性生活となる。肉的生活は肉體の幸福を以て目的とす。靈的生活の目的は肉の幸福を犠牲にして進んで宇宙の目的を靈我の目的とし、靈我は大靈と合致せるが故に自己の有らん限り向上の爲に努力す。靈我實現主義である。伏藏啓發せんが爲めには身體の苦勤艱難は甘んじて受く。或人曰く人は油壺に油を盛つて常に燃しつゝあり燃し盡す迄は燈せと。人は天性痴鈍なりとも大靈と繋る靈の伏能あり。至心摧勵の結果は天稟の偉人よりも功を遂ぐる事大なり。實に靈の伏能は宇宙と共に無限である。大道法を根底とす。伏能遺憾なく發揮して無限に向上する菩提心と爲る。宇宙大道と一致する意志と云ふ義である。

佛教に菩提心を發す者は最も大なりと爲す。假令現在は小にあるも其意志に於て宇宙と共に大なるなり。昔印度に羅漢果を得たる聖者あり。一の小沙彌（しやくみ）を侍者として道に就く。自ら前に行き沙彌

(びき)を隨行せしむ。小沙彌自ら念願す願くは我大菩提心を發し成佛せんと。聖者他心智を以て沙彌の意念を知見し、おもへらく、此の沙彌現に少なりと雖も其の志願大なり。我沙彌に侍し隨行せんと。沙彌が携帶する物を取て沙彌を前立たして自ら隨行す。沙彌又念願す、大菩提心を發して一切を度す事甚だ苦難なり、自ら堪へざる處なり。如(ごと)かじ羅漢の靈果を得んにはと。時の聖者又沙彌の志念を見て自ら前に立ち沙彌を隨はしむこと例の如し。大菩提心を發す者現在は小なりといへども將來偉人と成らん。人は其理想に又心願に遠大なるは現在小なりと雖も實に畏敬するに値あり。志願の最大なるもの菩提心なり。

人は肉體より見れば動物の進化したる特等の動物たるに過ぎざるも、大靈と繋れる靈の伏能を開發し靈的生活に入るの寶鑰を授與せらるゝの特權を得たる精神生命なり實に大なる宇宙大靈德を左右するを得。靈能を實致に活動するに至らざれば永遠の目的に達することは能はず。此の靈能實行の菩提心は最高等なる道德である。宇宙中心終局なる眞善美の極致に到るの道德心である。

道德秩序。道德には喻へば世間の國道又は縣道と云ふが如く其の驛路の中心終局なくてはならぬ。帝都を終點として其に向ふ如く道德行爲の目的も亦然り。大菩提道とは無上佛果の道。蓋し心靈が大

靈と合一し神の聖意と合一したる道德的情意を云ふのである。

大道心は如來の聖意にして一切衆生靈性の合一意志である。人生の無上大道に達するを目的にする意志が菩提心と云ふのである。

此處に達する菩提心を發せば我と他と同體の慈愛心となる。

大靈と合一する道心は靈的生命の生活である。喩へば太陽の力用を離れて肉の生活能はざる如く、吾が靈が大靈の靈力と親密に關聯すべき菩提心なき生命は、靈に飢へし生命である。内に省みて千萬人と雖も恐れざる高等なる勇氣なく、天に赫（か）く理想なく、氣品卑く靈的勇氣奮起せず。自と彼との同體の慈愛なく、同體大悲の情操なきものは他人を感化する力なく、斯の如き意志なきものは、たとへ其の業に成功するとも、唯だ利己の劣情を満足せるに過ぎず。大靈の意志たる大道に範（の）らずして何にか達せん。彼が前途は唯だ死を怖るゝと此世に執着を遺（の）すに在り。其の意志に於ては寧ろ憐むべき飢鬼に過ぎぬ。

自己の靈の伏能を開發せん靈的意志は菩提心と爲る。此の菩提心は宇宙の大道法と合致する意志である。故に靈性の欲望する處は宇宙大道法である。大道法の目的は一切の衆生の靈性の意志である。

宇宙は大道法の常恒運流にして大靈の妙用實に不可思議なり。天體の秩序人の社會の發達、終局は大靈に歸す。其の道法は宇宙に常に流行す。此の大道法に契ふ時は圓滿に發達の性を遂ぐ。此の性を遂げんが爲に一心に努力し道法に則つて努力し然して其の實行が道法に順ふ者は益々向上す。宇宙大道は自然界の方面に在りては其の秩序正しく天地位し百物成生して功を修めつゝあり。

人もまた宇宙の大道に則つて、最終の目的に向つて進趣し、自己の伏能を有らん限り發展さして向上的生活すべし。

往

生——理と事

往生に形式と活動、理と事とあり。形式とはすでに光明發得の上には從來の我にあらずしてみだの子たる我なり。即ち肉の我は靈我となり薩埵は菩提薩埵たつと爲る。即ち光明を得た人と爲る。娑婆に居ながら淨土を觀ず。相待因果の心にあらずして絕對靈界の人となる。

盡十方無碍光明中の人となり、之精神の形式に於て淨土の人となりしなり。次に娑婆にてみだの清淨光に靈化され玲瓏と輝き感情には法喜禪悅の妙味を常に感ぜられ意志は靈化して意業の所作悉く聖

旨より我に現はるゝなり。

事の往生とは往は至善に向ての行程にて歩々に向上し行きて菩提の大道を進み階級的に進むを往とす。此には靈と肉、煩惱と菩提との健闘。若し光明を離るれば急ちに肉の煩惱に横領せらる故光明の靈力を以て逆襲す。自力と他力の別は自力は罪惡にて他力は正善である。他力の光明を以て自己の闇黒を破り歩々に新なる不斷の革新不斷の向上を一生にわたつて斷やさず。

此道德の制裁は悉く如來の靈的光明によりて得らる。若し光明を得ることなければ終身肉の奴隸となりて三惡の闇に墮落すること免れ難し。光明靈化の力を以て一生を通じて至善の行程となし臨終の夕を期す。之を往生の實行とす。光明の大道を往進し勇趣するの謂なり。傳道家は衆を率ひて光明の大道と共に進むを目的とす。即ち自己の心靈に燈りつゝある光明を以て三業の行爲を以て他人の意志を照し靈化の徳を以て大道に進ましむ。是を傳道の目的とす。

舊式の往生は世を厭ひて死に往きて死後に樂土に生るゝを意味す。今往生は精神的に自己心底の靈性を如來の靈光に開發せられ靈の伏能が顯動態となるを生と云ふ。復活の義である。復活の靈は光明の大道を勇進邁往して日々に新に生れ時々に活ける靈活を往生と爲す。

更

生

——精神と身體

修養の宗とする處は自己の心意と如來の恩寵との投合にあり。即ち自己を如來の光明に投歸没入し肉我に死し靈我に復活するにあり。要する處若は口稱、若は憶念、一行三昧をもて一に如來に心意を注ぎ、心々相續して止ざる時は、若は頓速に若は漸次に如來の心光と感合し、恩寵喚起の機熟し、信心覺醒し心靈の曙となりぬべし、之を恩寵の喚起と爲す。次に開發。上の三心五行によりて信心覺醒し、如來の心光をもて自己を返照する時は、己が罪惡を自覺し、道心の苦悶を感じ、尙進んで心靈の開發を期する時、心光内に薰じ恩寵の和氣を感じ、七覺心の華開き、妙感靈應の神機、四面玲瓏歡天喜地、身心融液不可思議、其内容の眞味は言語道斷に念慮の絶たる處。こゝに於て全く肉我の罪より脱けて靈我の生命とし、心機一轉したるに及びて即ち人格の革新なり、之を精神の更生とす。經に「心の所願に隨て其國に生ず」と。信仰の結果、體現となる。恩寵開發の目的は心光を體現すべき實行にあり。「其國に生」とは往生即ち更生なり。此に二位あり。精神と及び身體なり。

精神の更生とは従前の肉我を轉じて眞我の生命と化(か)り、情操一變する處、すなはち新しき人となる。光明界裡聖の者として昨日の我と異なる觀あり。有餘の依身は變らねど神は淨土に棲み遊ぶ。聖懷の中に安立する眞情は毀譽八風の爲に動搖されず。既に精神更生し去つて現世界を觀じ來る時は、昨日のそれと異れり。現世界は曾て蔑視したる如き厭穢の魔郷にあらで、是よりは彌向上し目的なる眞理の靈界に進むべき菩薩が天職を果すべき方便修行土なりし。斯光吾人を自覺せしむるに人生の眞理を以てす。然り而して吾人はいかに聖意を體現せん。いな光明を現はすべき行動せん。曰く、吾人は聖子たる靈我現實の爲にあらゆる力を竭すべきにあり。

即ち理想の觀音として我と他とを同一視し、他の苦は即ち己が苦なり、己が樂を以て他に分たんと欲す。正義の意志は勢至ととうし、即ち己を尅(せき)め己を懺(ざん)て聖意の現はれにつとめ。己が分を守り他人の福祉を保護し、又眞勇沈毅いかなることに望みても屈せず撓まず。また吾人は不動の智劍を執りて己が貪瞋痴を害し。地藏の愛に倣ひて世の人に待せん。高尚なる理想を文珠の聖童に習ひ、遠大なる希望を普賢の行願に學び。向上進趣、萬善萬行をもて此土に樂邦を實現せん。

惡人の迫害は心靈を研ぐの利器。一切の誘惑は尅己忍耐の試檢具、若し現世界を以て目的ある階梯

なる修行土と觀じ來る時は、菩薩六度萬行を修すべき諸々の器具が全備するに非ずや。經に此土一日の修行は淨土に於て百歳するに勝れりと。吾人は斯る大利なる此土なることを自覺するが故に、寸陰を寶とし己に本務を竭さんとすべく、然り而して方便土のつとめを全く卒(はな)る日には、必ず目的たる實在の報土、即ち無餘涅槃界に歸る期あるを信ず。經に「其國に生じ諸の菩薩聲聞大衆に共に歎譽して其功德を稱せられ」とは蓋し精神更生しおわつて聖旨實現の爲に活動せる人を稱するなり。

身體の更生。

すでに更生したる精神は如來大心光中に理想の淨土に逍遙(しやうぎやう)ぶものゝ、肉の有らん限りは自然の約束を全く脱する能はず。彌々方便の業を卒る曉には、無明生死の夢醒て大ネハン城にて無上菩提の宮に住し、眞善妙美の園には常樂我淨の華鮮かに、四智圓滿の日は明けて、三身一如の月清らかなり。然るときは即ち體は本覺の都に在て化(け)を百億に分ち、こゝに於て一切諸佛は即ち本覺の彌陀。彌陀即一切諸佛たるの眞理は自ら證らん。

智情意の轉化

菩提心の中心は情操なり。

「菩提心とは人の心が彌陀の恩寵との致一の心機にして、人の初めて菩提心を開展するは佛知見の開示にして、啓示に無明の夢覺醒して、従前の天然自己を滅殺するに至る。此の自己滅殺は情操轉依の消極の極にして意志信仰の覺醒は積極の初めなり。」

啓示が先驅にて、次に心情に更生、情操轉化、次に意志靈化、この三を合して菩提心と云ふ。菩提心に情操を中心とするは、情操は人を司導する原動力にして、この情操の轉化は即ち更生なり。この更生は全人格の精神生活の更生にして、一切の意志主我を眞我の中に歸命せしめ、全心を盡して阿彌に歸入するが故に、更生と云ふ。人の肉の心理機定の轉化故に、また轉依(えんい)とも變易生死(いんじき)とも稱す。

更生は初め佛知見により初めて正知見覺醒して、次に情操を轉化してよりは、大菩提を自己意志と

して、其の目的に協力して積極的方面に活動するにあらざれば、菩提と云ふにたらず。菩提心は正知見にて心情を照すが故に、自己の惡を見ること明かにして、全く従前の主我主義と異にして、自己の罪惡を滅殺すること、所謂曉明に賊を捕へるが如し。天然の妄知見と情操とは賊を認めて子とするが故に賊を滅殺すること能はず。人は菩提心を發して覺醒せざる間は、罪過を認むる能はざるが故に、自ら罪惡の中にあるも嫌忌せず、正知見によりて道を顯現すれば、賊即ち罪惡の種子を滅殺せざれば安んずる能はず。

自己胸中の阿彌即ち良心と衝突すべき罪惡は憚りなく滅殺し、人は全く恩寵によりて情操に轉換し罪障消滅するにあらざれば自ら安んずること能はず。すでに情操轉化するときは自ら阿彌の中に全く安穩なる情となることを得るに至る。すでに自ら神的安穩なるは罪障消滅したる心情の状態なり。

人は罪障消滅して恩寵に融合し大菩提心として大菩提の勢能に致一して融合したる情操は、煩惱のみならず苦毒も理想に解脱して、常に有爲(有)の生滅のあるにかゝはらず、情操には觀念的に阿彌の中に安住し、即ち表面の有漏(有)の浪風はあらうがまゝ、心情は阿彌の宮殿に安住して、世の誘惑を恐れず、また大火に燒かるるとも吾が此の土は安穩にしてと説くが如し。全く眞我の中の自己として

安寧なる精神生活を得。

最深の内面は無量永恒の中の生命として、無限の壽の生命として、人「大火に焼るるも我が此の土は安穩にして、天人常に充滿し、園林諸の堂閣種々の寶をもて莊嚴す」とは、眞我と融合したる内容を表明したるに外ならず。

罪障消滅し、神的融合の心情と共に、意志には靈化、菩提心として阿彌との致一的の意志をなす。心情融合の花は靈化の意志の實を結ぶべき方便にして、靈化の精神が最も圓滿に自己を成熟したるはすでに菩提心成じたるなり。

靈化したる意志、靈化したる靈格を法王子また童眞と云ふ。内面に阿彌と致一の意志は法王子と名づく。この菩提心が一切の情操を司りて、また一切の行爲を命ずる處の原動力となる。然れども靈化は菩提心の性格にして末だ行爲にあらず、一切の神的行動の衝動たり。

この靈格神的衝動より發動する行爲は波羅密(波)にして終局に到る過程たり。

知——煩惱罪惡の認識

情——罪過の感情、苦悶

意——煩惱を滅殺する意志の反動

一、煩惱の所在を發見するは啓示によりて覺寤したる知力にして。

二、知見に照らさるる感情は煩惱より衝動せる罪業が良心と衝突する罪障の感情に苦悶す。

三、この賊を知り（知力）之を嫌忌して苦悶する感情あるも、賊を捕縛して殺すものは惡に反抗する意志の性能、即ち修練する意志なり。

古人曰く、戒は賊を捕へ、定は之を縛し、慧は賊を殺害すと。

今は知力の恩寵にて賊を發見す。心情の恩寵は賊を縛す。意志の恩寵は賊を殺害す。之は消極。更に積極には安立。歸命——あみに歸入し。心情致一に融合し。安立す。

聖 意 體 現

信心開發すれば心機一轉し、靈き我生命に復活したる後は即ち佛子である。

梵網に謂ゆる、衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る。位大覺に同じ已（是）れば即ち是諸佛の子

なりと。

聖道門は彌陀佛一佛の分身の方より見て諸佛と云ふ。淨土門は聖道の諸佛を統一して彌陀佛と云ふ。彌陀と諸佛とは不一不異の同源なり。哲學的汎神的に諸佛と云ひ、宗教的に一佛と云ふ、本來一なり。今は彌陀の法王子と爲す。

佛子佛心佛行、如來と共に在り、我如來中に在り、如來我にあり。

無限の光壽は吾人の個性に依つて現はる。此の個體は、無限の大海を根底とし尖頭を水上に現はしたる巖である。

佛子、聖意を自己の意とし三業四儀を以て聖意を現はす。之に三級あり。十行と十金剛（十向）と十地となり。

信、住、行、向、地

喚起し開發する時はすでに十信の滿位として如來と自己との合一不離の眞理を知見し、

十住の滿位としては感情的に如來の大我と融合して、三密冥合、神祕的の幽邃甚深、不思議の靈應妙感を実驗したる上は、常恒大我の中に安住するの心情と爲りしは、十住の滿位にて、すでに從來の罪惡我は轉じて聖子たる靈我と生れたり。是より佛子としての實行は行爲を以て實現す。如來より獲得したる生命と勢力とは三業の行爲に現はる。

十行即ち行位とは聖意を己が意志と爲す道德的行爲である。道德と云ふも道德の動機が最高等なる理想即ち如來より我に現はれたる道德の原動力なり。道德の實行には意志の鍛鍊を要す。此の鍛鍊即ち如來の靈化である。

十善、八正道、六度等は佛子の三業を道德的に陶冶するの機關である。之を自己の力にて陶冶するは實に難行道である。若し自覺して覺行圓滿、菩薩の願行を究竟せざれば成佛出來ぬとすれば、成佛は實に成じ難し。然るに宗教的に如來の恩寵を被むりて佛の聖意に靈育せらるゝ時は、任運に作爲する處自ら佛行と爲る故に易行道である。

超日月光——行、向、地、

行（十行、性種性）

神の道德心は如何に自ら修練して波羅密即ち圓滿に到達すべきや。行とは徳行。

先づ自己の意志を無上道に行爲すべきに、波羅密は常恒の過程なるが故に不斷に進趣して退轉すべからず。神の意志が行爲をなすべき性格鞏固にならざるべからず。この過程は二河白道の譬の如し。無上菩提の神の白道に貪瞋等の水火の二河やゝもすれば道を横領せんとす。然れども波羅密の岸に到る意志神的行爲清白の吾人が無上道意の道は、すでに白道たることを意識す。

健闘。

恩寵による注意と勇氣とを緩むる時は、六賊は後（おし）より來て、虚偽の愛の面を被りて菩提心を掠奪せんとし、貪瞋の二河動（お）もすれば神の自己をひたさんとす。神の聖き名により、幡をたてて、健（お）げなる健闘に、勇氣を鼓舞して、之を攻むるに非ざれば敗走を免れず。

所謂佛吼をもて吼し、法鼓をうち、法嬴(ほうりゅう)を吹き、法劍を執り、法幢を建て、法雷を震ひ、法電を耀(かが)かし、法雨を澍(そぎ)等、菩提の意志は自己胸中の煩惱魔を習怖して歸伏せしむ。

外寇は恐るるに足らず、自己の主我幸福主義の内賊だに伏滅せばいかに六賊侵來するも之を防禦するは容易なり。

行の位を性種性と名づく。

菩提道德性を自ら修練して、從來襲ひ來りし惡習を變じて、神的性格に變化せしむるなり。

佛性即ち遺傳恩寵の神聖正義の正因と恩寵との善を精修し、菩提心を發達せしめて、神的活動をなす性格を熟達せしむ。菩提心は利己主義幸福主義を捨て、良心と衝突する所の意志の素質を捨つ。

波羅密は中途に滯らず飽くまで至善の中心なる阿彌に向つて進趣すべきの性格にして、鞏固に熟練精修して天然の意志が鑛垢をさりて純正に神的性格をなすべきなり。主觀を鞏固にして客觀目的に活動す。

長養。

此行を長養ともいふ。菩提即ち高等なる善心を修練して波羅密の過程の進むに、恩寵を本として更

に恩寵の開展進歩を助く。改善に精進して退せざるを要す。菩提は自己の終局目的、菩薩の天職として自己を盡し、菩提の善に改進し、性格の改善、情操菩提によりて鞏固なり。情操が神的情操に更生、生活と性格が改善の道德的過程と共に連絡して全うするを得べし。

長養とは、たとへば一時の收穫をほこりて共に肥料と耕耘とを怠るは終局の目的に好結果を見ること能はざるべし。

十行は改善して恩寵による人の意志の結果にして、自利の結果なり。是よりは進んで客觀目的に阿彌の中の活動をなすは十向にあり。

菩提心自利修練

健闘精進

性種性をなす

自己の道德長養

向（十回向又十金剛（道種性））

波羅密的客觀的に阿彌の目的に協力するは、先には自利の菩提心の修練熟達、之よりは他を阿彌の理想にと。

一切衆生が阿彌の中の衆生なれば、眞我の我には彼我なく、同事利行ならざるべからず。この實行行爲が全く菩提の行爲にして、阿彌に合一したる人の意志として活動す。即ち絶對阿彌の個人現なり。

一、救護衆生、離衆生相。一切衆生は同じく阿彌の理性なるが故に。

向とは事を回らして理に向ひ、己が所作を悉く衆生に回らして衆生に向ふ。

活動不壞。天然に支配せられたる意志を脱しての靈化の意志は神的活動、衆生に入りて利せしむ。他縁に遇ふも性格堅固にして金剛の意志破られず、致一、内面致一の個人として菩提の活動す。神の意志内容を自己の目的とす。若しこの目的に協力せざれば菩提に衝突す。

隨順衆生。道德的自律が客觀的目的を主觀の自目的とす。即ち一切衆生は阿彌の同一理性なれば、

衆生の苦は我が苦なり衆生の罪惡即ち我が罪たりと。故に經に衆生の病は即ち我病なりと。道種性とは恩寵によりて圓滿に靈化せられたる道德情操即ち道と爲す。この道情が實行また修練し長養し來りし結果道種とす。道種は是よりすでに成熟したる種性(しゅじやう)が其の種性をもて客觀界一切に普く施さんとする勢力なり。道德の成熟したる種をもてまた一切に播布する種性なり。

道とは即ち菩提にして性種性は改善の性格、道の菩提とは阿彌の聖意をもて自己の心として、阿彌即ち自己と、恩寵に入りての道德態、一即一切、衆生を自己として阿彌の中なる自己の客觀的自己道心を道種性とす。

この種性を鞏固にしたるを金剛と云ふ。先には絶對の中の個人の性格を鞏固にせしを、いまは自己他を鞏固にす。すでに是まで自己修練の結果よく經驗あるをもて阿彌の内の衆生に之を頒ち之をたすけ、自己のなすことは即ち阿彌の實現にして之を見聞の輩をして菩提心を起さしめ、其の三業の所作が即ち阿彌の聖意の實現として彼を刺戟して道心の動機となす。故に我が身を見んものは菩提心を發し我が説話を聞くものは斷惡修善せよと云ふが如し。

菩提——上求下化

向上向下、致一

金剛不壞

道種性——利他の原動力

利他

地（十地又は十聖）

佛知見啓示によりて佛の正道に悟入して、自己は絶対なる眞理と觀念的に致一たることを證明し、また其屬性たる報應の二身依正（じし）の莊嚴も精神態に證明し、感情には罪惡の主たる主我及び屬類を滅殺し、眞我の中に融合し、之に安立し、靈化の恩寵によりて道德情操を鞏固にして性格を完成して自利の徳を完うす。

向位としてはすでに知見し融合したる阿彌の中なる衆生なれば、即ち同事利行（じしり）衆生の模範となり、また自己の火をもて他の木を焼くが如く同體の愛をもて他を見るのみならず他を利するを以て

自己の利とす。

進んで聖位(十地)に入りては、絶對阿彌を離れて我なく其の目的を自己の目的とし、精神生活の全體を阿彌に投じて、表面は個人なるも内面は阿彌の一員にして、之を意識するのみに非ず、精神に全然主我及び天然の惡素質を脱却し、客體目的が全く自己の目的にして、自己は客體の方便のみ。所謂「十方界に入て苦の衆生を救攝(きふ)せん、虚空法界も盡きんや、我が願も亦斯の如くならんと。」

大菩提心は絶對をもて自己とす。故に自己を度するも他の個々を度するも同じなるべし。論註に、「菩薩は己が智慧の火をもて一切衆生の煩惱の草木を燒く、若し一衆生として成佛せざる有らば我れ作佛(さく)せず」と。

一切衆生を度し盡すとは、個人即ち全體阿彌の故に、絶對の内面には自他なきが故に、また自ら先に成佛して他を度すことは、火○を一切の草木を摘みて燒きつくさしめんに、草木未だ盡きざるに火○すでに盡く。其身を後にするに而も身先だつが如し。菩薩一切を攝取して同じく終局に歸せしむ。

地

阿彌の個人として、神聖正義と恩寵とによりて聖的衝動に行爲し、地より萬物を化育するが如し。

また地は大地の如く、絶対阿彌の恩寵は天日の如く、太陽等が地上の萬物を化育するが如く、阿彌の内容としての神聖正義恩寵に同化して、よく聖化したる内容の聖的衝動として、内の徳光は自ら世間を照し、自利々他、世の光となりて、人を感化す。また大地の萬物を生ずるが如し。譬へば絶対の阿彌の性能は天の如く、よく靈化したる菩薩の菩提心は地の如く、地ありて萬物位し萬物育するが如く、天と地との關係によりて萬物の發育する如く、靈格の人と無限の恩寵との關係によつて無限の恩寵を發現す。絶対の恩寵は本來法界に周遍するも、靈化の人格によらざれば顯現するによしなし。楞伽(楞伽經)に所謂る十方法報應變化身は是なり。釋迦、龍樹、天親、慧遠、善導、天臺、南嶽、永明等。また變化身は、キリスト、マホメツト、モーゼ、ソクラテースの類はみな靈化せる精神態の人に於て、即ち無限の神聖態個人に化身したるに外ならず。之等がみな當時の人間に出でて、無限の恩寵の個人現の代表者たるのみならず。其門下より其の末葉に至るまで、また皆其の理性の具せざるはなければ、内容に何の程度まで發達せしかは他は之を測り知ること能はざるも、其の靈化と其の後の行為に於て（一）

また十地は一切の衆生を載せて解脫せしむるを目的とする意志なれば、無縁の慈を以て一切を荷負

する故に地と名づく。無縁の慈とは絶対眞我には自他なく、一切自己ならざるはなし。衆生は眞我の個々なれば孰れか疎親あらんと、阿彌の根底に立つて同情を表すを云ふ。阿彌の内容を自己の内容として、恩寵に充たされて、幸福主義なきが故に、神的平和にして内容つねに靈福なるが故に歡喜の地に安立す。

衆生を見るに主我を離れ、平等阿彌の内容によりて見るが故に同體。違順の情を離れて愛憎なく、自己に染著なく、他に適莫(ちやく)なく、彼もなく我もなく、競もなく、訟もなく、怨恨の心なく、離蓋清淨にして、厭怠の心なし、故に離垢と名づく。

内、神聖正義恩寵に充たされて、聖的衝動の言語動作に於て世間を照し、道德秩序のすべての動作として、世を刺激して感化せざるなし故に發光と云ふ。

内に神聖正義恩寵を以て先には時により縁に隨つて發現せしも、一般に感化を施して、客觀の神聖態として、道德秩序の正しき社會制度に顯はしたる標準光明となるが故に、炎慧と名づく。

阿彌の個人現が地上の淨國を建設せんとして、炎慧の光が社會を照して道德秩序が社會に顯はされんと欲するに、照したる劣態或は背徳の社會が漸々に化して、この善惡の二流は漸々に道光あらはれ

て、世の惡の闇は善の光に勝ち難く、道德秩序の光が黑暗を照破せんとするを難勝地。

社會に化現したる阿彌の道光は益々熾盛にして、魔雲妖霧は漸次にしりぞけて、理想の淨國斯の土に現前し、個々の身心生活完全に發展し人間最深の奥たる宗教機能開發し、黄金世界を顯す、阿彌が地に顯はれて精神の黄金世界は現前す、現時代のみにあらず其基礎を鞏固にして永遠に行はしめんが爲めに教團を作り、永遠に傳えしむべき準備をなす。教團が強固となり、各自は内面致一にして、數多の個々の絶對眞我の化現として、不動の信念と道德的秩序の源なる性格を強固にす。相互の内容の心は互に映寫し、甲の道光は乙を刺激し乙の行動は甲を模範として善く互に慧光と慧光とをもつて開展し發達すべし。故に善慧と名づく。

此が客觀的社會の制度に顯はるゝ菩提即ち道德態は、主觀界には個々の道德とし、客觀には社會制度の道德と顯現し地上の天國を建設するの法規となる。元來斯の如きの菩提の本體と性能とは法界に周遍して充さざる處なく一切を覆ふて神靈靈化するところの性能にして、業に循ひ縁に隨つて發現して、普く一切を活し開展して靈化する本質性能なるが故に、法雲と名づく。

初發心の宗教憧憬としては個人主觀的に發生し漸々に開展個々が圓滿に發達、次には、十地は客觀

を己人とし、即ち菩薩は自他なし。教團廣く云はゞ客觀の内面絶對眞我を我として、この團體の發達
は初一の主觀よりして全世界を覆ふに至る。其の發生は一人よりなるも其の本質性能は法界に充塞す
るが故に處として流行せざるはなし。

十地をもつて、十地の天國として理想的に淨國を顯現し、一切の個々の宗教心機を完全に發達せし
めて遺憾なからしめ、客觀界に觀念的に安寧世界即ち淨土を建設し、吾が土は安穩にして、天然の人
の苦毒と感ずる世界にすでに超越したる宗教の世界觀には靈福ならざるなし、故に吾三界の如くに三
界を見ずと。

超世の悲願を聞しより、我らは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかわらねど、心は淨土に栖み遊ぶ
と。

超世とは、世は天然世界の主我また世界依屬の意象なり。之を超越してこの物質にかゝはらず、精
神の意象を轉じて阿彌に超入すれば、個々悉く淨土ならざるはなし。

導師の、捨_ニ此穢心、即證_ニ彼法性之常樂、

吾此土娑婆即寂光土にして天然を超越したる意象には觀念的に寂光土顯現す。天然の人は感覺世界

の外に世界觀なし。

吾人の世界觀は阿彌陀佛去此不遠。感覺によらずして觀念的に盡十方無碍光界に安住し、法界に充塞せる大菩提の性能に協力して、一切と共に神的生活し、理想的の淨土に安立し、本來精神は阿彌の中なれば、遂には實在的に解脫して歸入す。

不入不出、永恒の生命として神的活动、即ち菩提の本態と致一せん。

聖

聖とは知情意の三機能圓滿に精神及び身體の精神生活に於て最完全に發展し、絶對眞我に安立し、無上道德の終局目的に協力して、全く自己を脱し、大菩提即ち宇宙の終局目的を自己の目的として神的活动するもの、表面は己人の如くなるも、全く内容は阿彌にして世の光明となる。大經に、「如來の辨智を得て一切を開化し、世間に超えて心は常に度世の道に諦住し、一切萬類のために不請の友となりて群生を荷負して之が重擔となる」と云ふ如き是なり。

導師、然師、及び自己を脱して全く阿彌の個人として世を化するもの悉く聖なり。

たとひ外面によらずも内面に完全圓滿に靈化せしものは悉く聖なり。自己を離脱して大菩提心をも

て自己と定めて其神的衝動より活動するものはみな聖となす。

十聖の位には、大菩提心に自他なし。客觀の團體の濟度過程は即ち自己にして、無上菩提の願作佛心は即ち是れ度衆生心。度衆生心とは即ち攝取衆生、終局に歸趣せしむる心是なり。

行儀分

初發心より信念増進し光明を獲得し全く光明の生活に至る迄の道程に三階あり。一喚起位、二開發位、三體現位。

難思光 喚起の位

甚深難思の光明を、至心不斷に念ずれば、信心喚起の時到り、心の曄腫とは成ぬべし

初に難思光とは初心の輩には如來の光明と云ふも未經験のことなればいかゞに感すべきものかは識量(はか)することができぬ故に難思と云ふ。先づ信心を喚起する次第はかうである、喻ば良田が雜草の爲に荒蕪(あら)れるも之を開墾して良種を播く時は好果を獲べき如くに、人に本具の靈性あり我儘の煩惱に覆はるゝも、業障懺悔に心地を墾し、如來光明の聖種を素因とし、師友知識の保護を受け、殊に自から至心不斷に信念を運び、堅く執持して止まざる時は信心の萌發せんこと何ぞ疑ふべきぞ。

如來光明の眞理を聞き能く會得すれば其客體なる如來を憧憬憶念して飽までも光明に接せんとの熱

望が發る。然れ共中々に光明を得ることは容易でない。こゝに於て己が業障の深重なるを自覺す。志の深き者は彌信念の熱度を増す。信心の喚起に自修と傳燈とあり。自修とは自ら念佛三昧又は靈光三昧を以て刻苦摧勵して光明の喚發を期す、例へば木と木と摩擦して火を出すが如くにす。傳燈とは全く靈活せる師友知識の親切なる相傳に心力感傳して靈火を傳ふること、甲の焚火を乙の薪木に傳ふるが如くす。然ば縱令業障の濕氣も慈愛の火力に燥かされて信仰が傳燈(ついで)とらるゝ。何にしても人生の一大事なれば至誠と熱心でなければならぬ。

宗教の中心は神人合一にあれども如何にして之ができるとなれば、大靈は宇宙全體なれども、其中心を得ざればならぬ。小宇宙なる頭腦の中心と、大宇宙の中心との合一を主とす。大宇宙の中心無量光如來を自己の精神中心を以て一心不亂に專注專念して止まざるにあり。如來は心靈界の大日輪である。之を精神の本尊とすべし。天に在ては無量光如來、地に現れては釋迦世尊。一體の二面である。故に釋尊を通じて天に輝く光明如來を憶念すべきである。

聖善導は、如來眞金色にして圓光徹照して端正無比なることを常に想ふて捨てるなど教へられた。其慈悲の面影が目前に在すと想へば久しく純熟する時は靈に活ける信念は極りなき法悦と感じらる。

又朝夕の讚美禮拜は心靈を養ふの糧である。至心不斷に念じ信念内に増長し、恩寵の和氣に催され、靈き心の種は萌發し信念の曙光とは成りぬべし。

無稱光 開發の位

如來の慈光被むりて、七覺心の華開き、神祕の靈感妙にして、聖き心によみ更へる

すでに信心喚起したるは人の心地に播きし心種から初めて萌發したる位にて、是よりは恩寵を蒙りて信心の花が開發の位に進む。微なる光に接して從來の己を反照(か)み見る時は自分勝手の甚だしき自から慚恥に耐へぬ。然して罪障懺悔の念が切に起こり、改善せんとすれどもかたきに彌々己が弱さを信認せらる。罪惡の我は聖(き)きに更生(か)らざれば浮ぶ瀬がなきと想へば益慈悲の御親が戀しくなる。如來と共に在りて離れざる身にならざれば眞の安心はできぬ。如來と不可離の關係は心の花開くによる。心の花は七覺の枝に咲き匂ふ。七覺とは心念の心作用である。一擇法二精進三喜四輕安五定六捨七念。初に擇法覺支とはすでに信心喚起して如來を念ずるは定まれり。恰も曙光を得て太陽の方何を認めたる如くに。然れ共いかげせん業障の雲深くして親しく慈光に感觸することができぬ。煩惱妄想雜起して親子の間を隔つ。しきりに如來を念じて擇(え)んで專注(せんしゆ)する之を擇法と云ふ。二精

進。靈性は如來の子である。然れども魔の眷屬なる肉我が跋扈して靈的親子の合一を妨ぐ。罪惡を自覺し業障懺悔の苦悶を感じ、刻己奮勵鑛垢より純金を煉り出す如く。如來の心光彷彿として存(ある)が如く亡(な)が如く。心念強ければ魔障隨て厚し。種々の業相(さう)現映するも敢て意に介せず、自誓つて若し我れ心光に接せずんば死すとも動かずと一心金剛の如くならば何ぞ成功せざらん。例へば學業技藝等も熱誠に精練する時は成熟する如く又寶石琢磨する時は日光反映する如く、靈性精練すれば如來の日光反射すべし。三喜。三昧彌深く心念益微にし靈妙なる定中の喜樂を感じ。四輕安。久々に純熟するに隨つて融朗にして不可思議。身心共に亡じて唯靜中に輕快安樂を覺ゆ。五定。身心あるを覺えず無我神氣清朗にして片雲なく麗日天に赫き照すこと極りなし。神祕の靈感に佛我に入り我佛に入りて八面玲瓏。内容の歡喜言の及ばざる所、即ち是心靈開發の心相である。六捨、とは任運無意に佛と離れざること。初には靈境失なひ易し細心の注意を要す。すでに純熟久しければ、無意識的に佛を離れず。例えば薰香衣に染むれば衣亦香氣あるが如く、佛心即自心自心即佛心。念々悉く佛心と相應す之を捨と念との覺支とす。是の如き靈感は從來の罪惡我を降伏して清き我となり人の子が佛の子と生れ更りしを開發の位とす。

超日月光 體現の位

二六六

智悲の日月の照す下、光の中に生活す身は、聖意を己が心とし、三業四威儀に現さん

すでに信心開發し更生せし後は佛子である。如來と精神的に合一不可離の身と成りし。此よりは光明の生活新人として、一方には大靈日光の恩寵を被むり、一面には聖意を現はす靈的活動を爲すにある。智悲の日月は靈界の太陽なので、肉體が太陽の能力に依て活ける如くに、心は如來光明に依て聖き生活を爲す。常に如來の恩寵なる衣食住を受けて之を着之を食ひ大に力と成つて之を身と口と意の行爲に依て聖きを現すべきである。すでに此に至れば身は昨日と變らねど神は淨土の人である。大悲の懷に在て世の毀譽八風の爲に動かされぬ。自己心中の靈性の聲は如來よりの命令である。吾人は又如來の權化たる釋尊の模範に則りて行爲すべきである。佛陀は提婆が逆惡心を以て害を加へたるも慈悲心を以てかへつて愍れみ給ひしと。世尊が生涯五十年間の奮闘に吾人は倣はざればならぬ。又吾人は光明中の生活と云ふも肉のある限りは靈と煩惱との健闘を續けざるをえぬ。光明の生活には六度を以て向上すべく、六度は即ち同情と正義と耐忍と勤勉と靜慮と智慧とにて、如來を親とし一切が同胞なれば何人にも同情せざるを得ぬ。正見正思正語正業は正義である。忍辱に就ては釋尊前世忍辱仙の古

へに倣はん、忍辱仙は迦利王の爲に罵詈のみか劍を以て手足を切られ彌頭を裁れんとせらる時に、王の試験に依て己が忍力の成就するを知れりとて、其恩に報ふべきを誓へりと。又勤勉は靈性を研ぐの力たとひ發揮したる心靈も活動し精進せざれば錆る慮あり。故に光明中に力行すべきである。靜慮は活動の爲に靈力を養ふにあり。智慧は如來の神聖より命令を受けて一切の行爲を指導して至善に向はしむる光である。四儀とは行住坐臥に佛と共に在りて佛行を爲すにあり。